

同志社大学神学部 公開シンポジウム

**戦争・平和・宗教
—日本とドイツ—**

講師

イエルン・ティーセン

(ドイツ連邦軍社会科学研究所所長)

小川和久

(軍事アナリスト)

日時

2005年2月19日(土)

午後1時30分～5時

場所

同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

共催

同志社大学 神学部・神学研究科

—神教学際研究センター (CISMOR)

後援

ドイツ連邦共和国総領事館

Tel. 075-251-3330

<http://theology.doshisha.ac.jp>

プログラム

1. 開会のあいさつ 神学部長 森 孝一
2. 講演 ティーセン, イェルン
「国際安全保障政策におけるドイツの役割-経験と期待-」
3. 講演 小川和久
「日本の安全保障論議を科学的に論考する」

—休憩・質問用紙回収—

4. コメント 神学部教授小原克博
5. 講演者からの応答

講師の紹介

◇ イェルン・ティーセン(Prof. Jörn Thießen)

プロテスタント神学、ゲルマニスティク、歴史、医学を学んだ後、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州首相府顧問。1995年にはプロテスタント教会信徒大会(於ハンブルク)スポークスマンを務め、その後、ハンブルクの教会に牧師として赴任。さらに1997年来ドイツ連邦議会社会民主党事務局、国防相秘書を歴任し、2002年来現職。社会科学研究所は1974年に設立され、社会科学的見地から連邦軍の教育・訓練ならびに国防政策の学術的研究他に携わっている。

◇ 小川和久

陸上自衛隊航空学校、同志社大学神学部(中退)を経て「日本海新聞」、『週間現代』記者として活動。1984年に、日本初の軍事アナリストとして独立。現在「(株)危機管理総合研究所」代表取締役研究所長。(財)紛争予防センター理事、国土交通省・海上保安庁海上テロ対策研究会委員、総務省消防庁・消防審議会委員他多数の役職を兼任。50冊におよぶ著作がある。最新刊は『新しい日本の安全保障を考える』(共著)自由国民社、2004年12月。

講演要旨

◇ イェルン・ティーセン

「国際安全保障政策におけるドイツの役割-経験と期待」

ヨハネス・ラウ前ドイツ大統領は2004年1月の演説で、1648年のウェストファーレン和約が恐るべき宗教戦争を終わらせたことに言及し、絶対的な真理を要求することがいかに悲惨な結果を招くかに注意

を喚起した。そして宗教と国家を分離させることで良心の自由、信教の自由が確保され、国家は宗教的威光で自らを権威づけず、自己のみを絶対視しない姿勢が宗教界に行き渡ったことを伝えた。

ドイツは現在までに 12 万人の兵士を平和維持活動のために外国に派遣してきた。両大戦の教訓から連邦軍兵士はとりわけ制服を身につけた市民としてその職務中でも完全に民主主義的権利と義務を有することを原則としてきた。配備される彼らの動機を堅固にするのは個人の倫理観でありそれを支えるのは宗教的価値観である。

ドイツの外交と安全保障政策はここ 10 年で基本的に変化した。NATO や EU とかかわって派兵する際の緊急性と議会が必要とする慎重な審議時間の緊張関係はなお論議の課題である。他方で国内では自国の問題にもっと力を割くべきであるという意見も強くなっている。政治的、倫理的、宗教的諸次元で平和維持活動と軍事力の関係を案内する。

◇ 小川和久

「日本の安全保障論議を科学的に論考する」

先進国の中で唯一、日本の民主主義は形式に流れている。それは、国家・社会の主人公たる納税者が税金の使途を通じて政府をチェックし、より望ましい方向に導く事を怠っている点に象徴されている。日本では、官僚機構のみならず、納税者の代表たる議会（国会）、アカデミズム、ジャーナリズムは機能を停止し、科学的かつ論理的な議論は存在しないに等しい。この傾向は、特に日本人が苦手とする外交、安全保障、危機管理（クライシス・マネジメント）の面に顕著で、世界平和の実現に責任を持って関わろうという日本国憲法前文の精神とも矛盾する状況を生み出している。日本の防衛力整備、日米安保体制などの現実を通して、「平和国家・日本」の進むべき道を考える。

なお、宗教に導かれた善意 good will がないところでは、いかに客観的で科学的で論理的な考えや議論も平和やヒューマニズムとかけ離れたものとなる可能性が少なくない。この両者（good will と客観的で科学的で論理的な考え）が「車の両輪」としてバランスよく機能することが大切である。